

地域に伝わる伝説や民話、文化財などを紹介

にしあいづ物語100選 その93

文：長谷沼 清吉

「^{じかたごけにん}地方御家人」と「^{じっこくつくりじかたもの}拾石作地方の者」考

- ・拾石作地方の者という武士がいた。これは農村に田地を給され住みついた藩士。
- ・拾石作地方の者とは幕末に金銭の上納などによって名字帯刀を許された者で、地方御家人と区別するために呼ばれた。

と、『西会津町史』にはあります。「地方御家人」とは、地方に住む御家人(藩士)のことで、年貢は納めていません。地方の者の「者」は士ではなく人、平民だからです。

藩では財政が逼迫すると、いろんな名目で多額のお金を上納させ、少額の賞格出金をさせました。天明飢饉(1782～1788 ごろ)の後には新町村の肝煎が355両余、沼平村(喜多方市山都町)の肝煎が100両を上納し、山三郷代官の上申をもって地方御家人を願い出ましたが、認められませんでした。

安政6年(1859)、野沢組6人、木曾組8人の肝煎が「拾石作地方の者の形の者」ということで現れます。その後慶応4年(1868)には、同じ人達が「拾石作地方の者」として現れています。「形の者」からさらに出金したので「地方の者」に昇格したとみられます。

それでは、地方御家人は何人いたのでしょうか。慶応年間(1865～1868)の御家人名簿が3冊あり、その本が手元にあります。それぞれ146人、146人、164人の人名が書かれており、全員合致しないので164人より増えると思われます。

地方御家人は戊辰戦争で正奇隊を編成し、新政府軍と戦っています。北方方部の人は相馬直登隊で白河口、坂部三十郎隊は三森峠(郡山市)、もう一隊は名称不明で赤谷口(新潟県新発田市)で戦ったとあります。そのほか藩士の諸隊に参加した人も多数おり、親子兄弟で参加した人もいたので、戦った人は200人を超えと考えられます。

大谷組・吉田組の肝煎は、地方の者と書かれているのは確認できていません。

野沢市場商人組頭の豪商小島二家には、「拾石作地方の形」と刻んだ墓石があります。一家は100両を上納しているが「形」のままです。肝煎ではないからでしょうか？

(参考文献)

『西会津町史』、『山都町史』、『歴史春秋 45号・83号』、『会津藩士人名録』

今月の表紙

今月は、3月1日に行われた西会津高校の卒業証書授与式から。高校生活最後のホームルームを撮影させていただきました。6人の卒業生と先生方の絆に、見ているこちらにも込み上げるものがありました。広報担当になり2年が経過しましたが、町内各学校の卒業式では、毎回涙をこらえるのに必死になりながら写真を撮影しています。

(10ページに関連記事)

